特集

2015年度入試 直前動向分析

大学入試センター試験まで残り1ヶ月半となり、今年も本格的な入試シーズンを迎えた。来春入試では数学と理科が新課程に対応した初年度入試となることに加え、看護系やグローバル社会を意識した国際系学部の新設ラッシュのほか、昨年に引き続き学部の定員増も予定されている。ここでは、10月に実施した第3回全学マーク模試の志望データをもとに2015年度入試の動向を探ってみたい。

国公立大学編

◆新課程初年度センター試験
志願者数は前年並み 現卒比率に変化

大学入試センターは10月16日、2015年度大学入試センター試験（以下「センター試験」）の出願状況を公表した。消印有効分を含む出願総数は、前年度確定分より1,516人少ない559,156人で、内訳をみると、現役生が12,064人（27％）の増加、既卒生等が13,580人（16％）の減少となっている（図表1）。

既卒生等が減少した背景には、数学と理科が新課程に対応した入試へ移行することがある。2014年度入試では新課程への移行を翌年に控え、浪人を数年する動きが強かった。そのため、既卒生是旧課程入試初年度だった2006年度入試以来、初めて1万人を超える減少となった。一方、来春の18歳人口は約2万人増え、新規卒業者数も6万7千人達える見込みであることから、現役生の志願者数は増加している。

最終的な志願者数は、本稿執筆時点では未発表であるが、重複出願分等を除いても前年度並みの約56万人になると予想する。

◆国公立大を敬遠する受験生
設置区分で若干の差異

ここからは第3回全学マーク模試の志望データをもとに、国公立大の志望動向をみていきたい。

国公立大全体の志望者数は前年比98％となっており、模試受験者数が前年比100％だったことを考えると、受験生が国公立大をやや敬遠している様子がうかがえる（図表2）。ここ数年続いている国公立大入試よりも落ち着いてきたようにみえるが、現役生の中で集計では前年比100％であり、減少は既卒生による影響が大きい。

日程別にみてみると、前期日程で前年比98％、後期日程で同97％、中期日程で同96％といった日程も減少している。また、入試の中心となる前期日程の志望者数を国公立別にみると、国立大が前年比98％と減っているのに対し、公立大は同100％と前年並みになっている。新課程入試初年度でセンター試験の科目負荷が大きくなるが、公立大は少ない科目数で受験できる大学が多いことが要因とも考えられる。

【図表3】は国公立大の志望者数を、旧帝大を中心とした難関10大学、これに次ぐ準難関・地域拠点10大学、その他の大学の3つに分類して集計し、その前年比を日程別に比較したものである。いずれのグループも前期・後期日程とともに前年比97～99％と減少しているが、難易度による顕著な差は見られなかった。

◆東大人気・京大人気は継続

次に、難関10大学の志望動向について、前期日程の状況を中心に見ていく（図表4）。

今年入試で志願者が減らした北海道大は、前年比100％と前年並み。総合入試文系・理系を含む志願者が減っている学部も多いが、法学部は前年比110％、水産学部と医学部は同112％と

【図表2】国公立大学志望動向：国立・公立別／日程別（第3回全学マーク模試より）

【表1】高卒者数と大学入試センター試験志願者数推移

<table>
<thead>
<tr>
<th>年度</th>
<th>高卒者数</th>
<th>志願者数</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td></td>
<td>全体</td>
<td>現役生（生徒数率）</td>
</tr>
<tr>
<td>2014年度</td>
<td>1,061,342</td>
<td>560,672</td>
</tr>
<tr>
<td>2015年度</td>
<td>1,068,382</td>
<td>558,156</td>
</tr>
</tbody>
</table>

*高卒者数は学校基本調査（教育庁）より（2015年度は直事業報告）
*志願者数は2014年度は確定分、2015年度は消印有効分を含んだ数値

関東10大学は、【図表4】参照

準難関・地域拠点10大学は、東京大、千葉大、横浜国立大、新潟大、千葉大、千葉大、福岡大、広島大、北里大、熊本大、

首都大学東京、大阪市立大
志望者が増加している。医学科では、2014年度までセンター試験と2次試験あわせて理科3科目が必要だったが、2015年度から2科目で受験できるようにになり、前年度比136％と志望者が大きく伸びている。難易度もポーラ得点率が3％アップの89％、ランクが1ランクアップの0.5ランク（偏差値76.5）と難易度は大きく変わらない予想だ。

東京大は大学全体で前年比95％と2年度続続で志望者が減少している。文科類では前年比94～97％となっており、二類・三類は前年比94～97％と難しいが、70％と難易度は1ランクダウンの0.5ランク（偏差値67.5）と易化する傾向をみる。2014年度入試で志願者が増えた理科類でも志望者数が減っており、2015年は前年比83％と減少が見られ、東京大学は来春も続く予想だ。

東京工業大は、理系の第1類（前年比94％）、第2類（同99％）をのぞき、すべての類で志望者を増やしている。特に、土木建築系の第2類は、後述する系統気候により前年比136％と志望者が大きく増加しており、難易度も1ランクアップし、1ランク（偏差値65.0）の予想だ。

名古屋大は前年比99％と減傾。文系では教育学部（前年比109％）をのぞき、すべての類で志望者が増加している。理系では理学部が前年比93％と減少一方、工学部が同104％と志望者が増えている。詳細分野では、電気電子、情報工学科が前年比106％と、国立大全体の同96％と比べて低い傾向を示している。大学関係者は、新修集中での枠を超えた新設でノーベル物理学賞を受賞したことから、志望者が多くになっているようだ。

近年志望者が増加で、一昨年に比べて、今年度は前年比103％で志望者が増加する。医学科は文系では調査が前年比109％と増加傾で、多く来春入試では志願者数減の文科類が同106％と志望者数増加を示している。これらの学部では、2014年度入試でセンター試験と2次試験で地歴の受験科目を変える必要があった。2015年度入試でのルールが若く、受験生の参加数が増加しているようだ。一方、理系では、薬学部（前年比84％）をのぞき、志望者が増加している。医学科は前年比122％、人間健康科学科看護学専攻が同140％と志望者が増加している。理科系は、北海道と九州、さらにセンター試験と2次試験をあわせて理科3科目が必要だったが、2015年度入試から2科目で受験できるようになる。

九州大は前年比94％と、今春入試から一転して志望者が減少した。医学科ではとくに文科類の減少率（前年比78％）が高く、難易度も1ランクダウンし4ランク（偏差値5.5）の予想だ。2次試験で初めて地歴が課され負担増となることから、受験生が敬遠されていると考えられる。一方、理科系では、理学部が前年比87％と減少したのにに対し、工学部は同101％と増加している。全国で唯一来春も理科3科目の受験が必要な医学科は前年比91％と、前年度の北海道・九州大に比べて顕著な結果となっている。

【表3】国立関係10大学（前期）の志望動向（第3回全編マーク横検より）

![Table 3: National University Relations 10 University (Early) Demand Trends (3rd General Mark Inspection)](image-url)

【図4】国立関係10大学（前期）の志望動向（第3回全編マーク横検より）

![Graph 4: National University Relations 10 University (Early) Demand Trends (3rd General Mark Inspection)](image-url)

【表5】公立大学（前期）学部学科別志望動向（第3回全編マーク横検より）

![Table 5: Public University (Early) Department Discipline Demand Trends (3rd General Mark Inspection)](image-url)

【図5】公立大学（前期）学部学科別志望動向（第3回全編マーク横検より）

![Graph 5: Public University (Early) Department Discipline Demand Trends (3rd General Mark Inspection)](image-url)

【表6】詳細分野別志望動向の推移（第3回全編マーク横検より）

![Table 6: Detailed Discipline Demand Trends (3rd General Mark Inspection)](image-url)

【図6】詳細分野別志望動向の推移（第3回全編マーク横検より）

![Graph 6: Detailed Discipline Demand Trends (3rd General Mark Inspection)](image-url)
私立大学編

◆新課程入試初年度でやや安全志向に、センター方式は敬遠傾向

第3回全統マーク模試の受験者前年比は、国公立大学編でも述べたとおり100％と前年並みである。私立大学全体の志望者数は前年比101％で、模試受験者数が若干上回っている。私立ではネット出願が今年度入試で急激に拡大し、合わせてネット出願と受験料の割引を併用する大学もいたため、受験生がより学内の併願をしやすい環境になっているからであろう。入試方式別では、一般方式が前年比102％、センター方式が同99％でセンター方式を敬遠する動きがみられる【図表7】。来年度からセンター試験の理科の実験方式・科目が大きく変更になり、出願時に理科①（基礎科目）、理科②（基礎を含さない科目）の組合せを決め、試験当日には変更ができないこと、基礎科目を受験する場合は2科目が必要となる。受験生が基本を欠さない科目は旧理科1に比べ出題範囲が広いという負担感が敬遠の要因となっているようである。

【図表8】は私立大の一覧表の競争（ボーダー偏差値）別に、昨年と今年の志望者前年比を比較したものである。昨年は難易レベルに顕著な差は見られなかったが、今年はボーダー偏差値50以下で志望者の増加率が高く、やや安全志向になっているのがわかる。新課程入試一元化ということもあってか、受験生は慎重に志願校を選ぶようである。

◆「文低理高」基調が変わらず、不人気が続いた「法・政治」系は人気回復

次に学部系別の志願動向に目を向けてみる【図表9】。ここ数年「文低理高」が続いてきたが、文系の人気がやや回復のきざしが見られる。昨年の第3回全統マーク模試では、文系すべての志望者が減少していた。しかし今年は全系統の前年比が100％以上と志望者数は増加に転じた。一方の理系は堅調な人気を示しているが、「理」学系が唯一志望者を大きく減らしている。

系統ごとの特徴を考えてみると、文系では「法・政治」系が大きく志望者を増やしている。この系統は法科大学院の不振から、ここ数年は不人気系の代表格となっていた。しかし今年は志望者が増加に転じ、文理合せた全系統の中で最も志望者が伸びている系統となった。この要因としては、受験生に学びやすく、難易レベルの易化が続き、狙いやすくなったことが、人気の回復につながっているとも考えられる。

詳細的には、文部科学ものの大学がスラブ・スーパーローバルハイスクール、スーパーローバル大学の採択結果などを通じ、グローバル化を推進していることを受け、国際系の志望者も増加している。「国際経済」が前年比104％、「国際関係」は同104％、「外国語」同102％となっている。一方で、文系で志望者の減少が目立つのは「心理」同95％、「社会福祉」同95％などである。

理系では、いずれの系統も堅調に志望者を集めていが、「理」学系だけが志望者を減らしている。「理」学系の詳細を見てみると、「数学・数理解析」95％、「物理」96％、「化学」88％、「生物」97％、「地学・他」100％で、「化学」が90％を下回る極端に低調である。「農」学系は今回の一模試志願者前年比は103％となっている。これは農学部の農学部新設によるところが大きい。この学部には約1,700人の志望者が集まっており、系統全体の人気を押し上げている。なお、既存の学部だけを比較するとみる限り、志望者の前年比は100％以上での前年並みとなる。「医・歯・薬・保健」学系は相変わらずの人気系で、前年比は「医」106％、「歯」117％、「薬」101％、「看護」107％、「医療技術」99％、「保健・福祉」94％となっている。「保健・福祉」「医療技術」だけが志望者数
募集人員40名に対し志望者108人、鳥取看護大は募集人員45名に対し96人の志望者となっている。看護学科は大学の新設を含め全国で15学科設置されるが、その中で500人以上の志望者を集めるのは同志社女子大792人（募集人員45名）、日本福祉大757人（募集人員35名）の2大学である。なお、学科を新設予定の東京経済大（現、東京経済女子大）と日本医学環境大（現、人間環境大）は設置認可の審査が手続きとなり、認可が出るのには早くとも12月になっておそれである。

その他注目される大学の動きとしては青山学院大学に地球社会共生学部が設置される。入試は他学部の一般方式と同様に個別学部試験（A方式・B方式）全学科で行われる。それぞれの方式の志願者数はA方式657人、B方式73人、全学部合計160人となっている。

学部・学科の新設ではないが医科大学の定員増が10月末に文科省から発表され、全国で10大学、41名の定員増となる。ほとんどの大学は地域特性の観点での募集となるが、募集方法の詳細は今後各大学のHP等で公表されるため医科大学志望者は注意を払っていただきたい。

【図表10】全国主要私立大 志望動向（第3回全国統計模様試験）